作文・絵作文コンクール

優 秀 作 品 集

（令和4年度版）

全国の附属学校園の子どもたちが先生との思い出や感謝の気持ちを

作文・絵作文で表現したものを一冊の作品にまとめました。

一般社団法人　全国国立大学附属学校PTA連合会

ご挨拶

平素は（一社）全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会の事業にご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。「作文・絵作文コンクール」の開催および優秀作品集の発行にあたり、主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

今年で第5回目を迎えた「作文・絵作文コンクール」は、わが国の教育を支えて下さっている教職員の皆様へ感謝の気持ちを届けたい、そして、その感謝の気持ちを表す「教師の日」の制定へ向け、国立大学附属学校のＰＴＡとして支援する目的で企画・開催されてきました。

今年度はこれまでで最も多い作品の応募をいただき、コロナ禍の中でも子どもたちが学校で様々な経験をし、成長している姿が想像できる作品が多く見受けられました。

この３年間、コロナ禍で時を過ごした子どもたちにとって、従来通りの学校生活を送ることが出来なかった事にとても残念な思いもありますが、これまでに誰も経験したことの無い環境を乗り越えた子どもたちは、このコロナ禍でさえ、それぞれの人生の中で自分を成長させる経験となり、未来へ羽ばたいていくのだろうと信じています。

そして、そんな子どもたちのそばには、子どもたちがいつも通りの気持ちで学校生活が送れるよう寄り添い、ご尽力いただいている先生方の姿が作品の中から感じられました。

この作品集が、子どもたちから全国の教職員の皆様に感謝の気持ちとなって届きますよう、そして、教員をめざす学生の皆様にも手に取って読んでいただくことが出来たら幸いです。

最後になりましたが、本コンクールを開催するにあたり、ご多忙の中、審査委員長を快くお引き受けくださいました児童文学作家のくすのきしげのり先生に感謝の意を表するとともに、たくさんの感謝の気持ちを作文・絵作文にして応募してくれた全国の子どもたちが、これからも健やかに成長されることを、心より御祈念申し上げます。

一般社団法人　全国国立大学附属学校PTA連合会

会長　大竹 昌士

「第５回作文・絵作文コンクール」に寄せて

本年度が5回目の開催となる全国国立大学附属学校PTA連合会主催の「作文・絵作文コンクール」が、全国から多数の応募によりとても充実した企画となりましたことをお慶び申し上げます。どの応募作品も素晴らしく審査委員の先生方におかれましては、審査に大変ご苦労なさったことかと拝察いたします。

本稿を、丁度、卒業式のシーズンに書いておりますが、最近は学校の卒業式では「仰げば尊し」を歌うことが、ほとんどなくなって来ているようです。理由としては、歌詞が文語体で小中学生には、歌詞の意を理解するのが難しいと云うことが主な理由とのことです。

しかしながら、子どもたちの作文からは、学校の先生から教わることは、単に教科の内容だけではなく、様々な物の見方・考え方、もっと大きく、子ども達自身のこれからの生き方までも、教わっているのではないかと思います。子ども達が、先生を人生の師と仰ぎ、その教えに感謝していることが伝わってきます。正に「仰げば尊し」の歌詞の意をそのままに表現しているのではないかと思われます。

国立大学附属学校園には、研究能力と教授能力に優れた素晴らしい先生方が多く居られます。このような先生方をもって、各附属学校園が今後ますます、日本の学校教育を先導することを祈念いたします。

全国国立大学附属学校連盟

理事長　吉田 裕亮

「作文・絵作文コンクール」に寄せて

一般社団法人全国国立大学附属学校PTA連合会主催の第５回「作文・絵作文コンクール」が全国の幼児・児童・生徒の皆様から多数の応募を得て、大変充実した取組となったことを心よりお喜び申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が学校生活に影を落とす一方、一人一台端末を活用した教育活動などこれからの時代を見据えた新しい教育が展開され、いま、子供たちは大きな環境変化の中にいます。こうした子供たちを学校や家庭、地域で暖かく見守り、寄り添い、導いていただいている保護者や教職員の皆様の日頃のご尽力に改めて感謝申し上げます。

教師は次世代を担う人間を育てる社会的に重要かつ不可欠の職であり、同時に、普段の教育指導を重ねる中で度々感動の涙に遭う、他ではなかなか得られないやりがい、価値のある職であります。本コンクールの入賞作品からは、全国の附属学校の現場教師の日常的な教育指導や子供たちへの声掛けが着実に豊かな心と体を育み、人格形成を促していることが伝わってきます。学校教育や教師を巡る課題も多い昨今ではありますが、本コンクールは、社会に教師の仕事の価値を改めて発信し、教師自身の志気を高めることにつながる、大変有意義な取組であると思います。

今後とも、本コンクールの更なる充実とともに、国立大学附属学校が大きく時代環境が変わる中で我が国の教育の進化に寄与する存在として発展され、発信力を高めることを祈念いたします。

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課

課長　後藤 教至

会長賞

秋田大学教育文化学部附属小学校　２年　津司 昌宗

先生がまいたやさしさのたね

秋田大学教いく文か学ぶ　ふぞく小学校

二年　つし　まさむね

楽しみにしていたじゅぎょうさんかん日、たくさん手をあげてがんばりました。今回は道とくのじゅぎょうで、やさしさについてクラスのみんなで話し合いました。思いやりをもつこと、親切にすること、おもいものをもってあげること、お年よりの手を引いてあげることなど色いろな考えが出てきました。

そして、みんなの手があがらなくなったとき、しんどうゆきこ先生が、「自分のとくいなことを生かして、人をたすけるのはどうかな。」と聞いてきました。たとえば、ドッジボールのとくいな人がにが手な人をまもってあげるようにです。ぼくは、自分にできることはなんだろうとずっと考えていました。

そんなとき、学校でわくわくおもちゃパークという行じがありました。生活のじゅぎょうで作ったおもちゃを見せ合って、一年生といっしょにあそぶのです。ぼくは小さな空気ほうを作りました。谷おりにした紙のまとをつくえの上に立て、空気ほうでたおしてみんなにあそんでもらいます。

ところが、ぼくの考えたあそび方では上手くいきませんでした。まどからの風や、よこを人が通ったときの風ですぐに紙のまとがたおれてしまい、空気ほうの力をぜんぜん見せることができません。ぼくがこまっているとエ作のとくいな友だちがやってきて、「その紙を丸めてボールを作って、空気ほうのあなにのせて、とばしてみたら。」と言ったのです。そのとおりにやってみると、紙のボールはひゅんといきおいよくとんでいき、まわりにいたみんなもおどろきました。

それから、ぼくの空気ほうはみんなのちゅうもくをあつめて、一年生のみんなにもいっぱい楽しんでもらえました。

みんなに空気ほうの力を見てもらえたこと

や楽しくあそんでもらえたことは、もちろんうれしかったです。でも、もっとうれしかったのは、こまっているぼくを見た友だちが、当たり前のようにたすけてくれたことです。

家に帰ってから、このことをお父さんとお母さんに話しました。すると、

「その友だちがしてくれたことは、しんどう先生が言っていた『自分のとくいなことで人をたすける』ってことだよね。」

と、せつ明してくれました。

「ぼくも友だちみたいにできるかな。」

と聞くと、

「前にしんどう先生が『まさむねさんは自分からすすんでゆかのゴミをすてて、教室をきれいにしてくれてます』ってほめてたよ。だから、まさむねもとくいなそうじでみんなをたすけることができているんだよ。」

と、教えてくれました。

つまり、しんどう先生が言っていた自分のとくいなことで人をたすけることの答えは、

20 × 20

ぼくの中にあったのです。ぼくにとってそうじは、みんなに自分を見てもらいたくてやっていたことではなく、やって当たり前のことでした。わざわざ人にやさしくしてあげようとしなくても、自分にできる当たり前のことをしているだけで、気づかないうちにだれかをたすけることができていたのです。

ぼくのクラスでは毎日、しんどう先生がぼくやクラスのみんなに声をかけてくれます。学校の行き帰りにあぶないことはないか、友だちとなかよくできているか、などです。これは、しんどう先生にとっては当たり前のことなのかもしれません。でも、そんな当たり前のやさしさがぼくたちをたすけてくれています。そして、先生のやさしさをうけとったクラスのみんながおたがいに声をかけ合い、やさしいクラスが作られています。

ぼくのクラスには、しんどう先生とみんなのやさしさがいっぱいです。そんな二年B組のことが、ぼくは大すきです。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

いろいろな「やさしさ」について話し合った道徳の授業。空気ほうの遊び方の改良について友達がアイデアを出してくれたことは、「自分の得意なことを生かして人を助ける」ということでしたね。そして自分にできることを考え、「自分にできる当たり前のことをしているだけで、気づかないうちにだれかを助けている」といった、とても大切なことに気づくことができましたね。先生も、そして子どもたちも一人ひとりが、自分にできる「やさしさ」の発揮のしかたで、素敵なクラスになっていることが伝わってきました。

Seeds of Kindness Sown by the Teacher

Akita University Elementary School, Faculty of Education and Culture, 2nd grade,
Masamune Tsushi

I was looking forward to the day of the open house. I raised my hand many times and did my best to answer questions. This time, in the ethics class, we discussed kindness with everyone in the class.

Various ideas came up, such as being considerate, being kind, carrying heavy things, holding the hand of elderly people, and so on.

Then, when everyone's hands were no longer raised, Ms. Yukiko Shindo who is my homeroom teacher asked, "How about using what you are good at to help others?

For example, someone who is good at dodgeball can protect someone who is not good at dodgeball. I kept thinking about what I could do to help.

At that time, there was an event called "Wakuwaku Toy Park" at school.

We showed each other the toys we had made in the life class and played with the first graders.

I made a small air canon. I folded a piece of paper, put it up on the table, and set it as a target for the air canon.

However, my idea of how to play did not work.

The wind from the window or a person passing by would cause the paper target to topple over immediately, and the power of the air canon could not be demonstrated at all.

When I was having trouble, a friend who was good at crafts came over and told me to roll up the paper into a ball, put it in the barrel of the air canon, and shoot it out.

I did exactly that and the paper ball flew away with great force, much to the amazement of everyone around me.

My air canon attracted a lot of attention, and the first graders had a lot of fun with them. Of course I was happy that everyone could see the power of the air canon and that they had fun playing with them.
What made me even happier was that my friend saw me in trouble and helped me out as they should have.

When I got home, I told my father and mother about this. They explained to me that what my friend did was what Ms.Shindo had said about helping others by doing what you are good at.

I asked them if I could do something like what my friend did.

Then they said, "Ms. Shindo complimented you on your action. She said you voluntarily throw away trash on the floor and work hard to keep the classroom clean. So we think that's what you are good at, too. You're already helping others by doing what you are good at, which is cleaning."

In other words, the answer to what Ms.Shindo said about helping others with what you are good at was already inside me.
For me, cleaning was not something I did because I wanted everyone to look at me, but something I always take for granted. I didn't have to go out of my way to be kind to others, I was just doing what I was good at, and without realizing it, I was helping others.

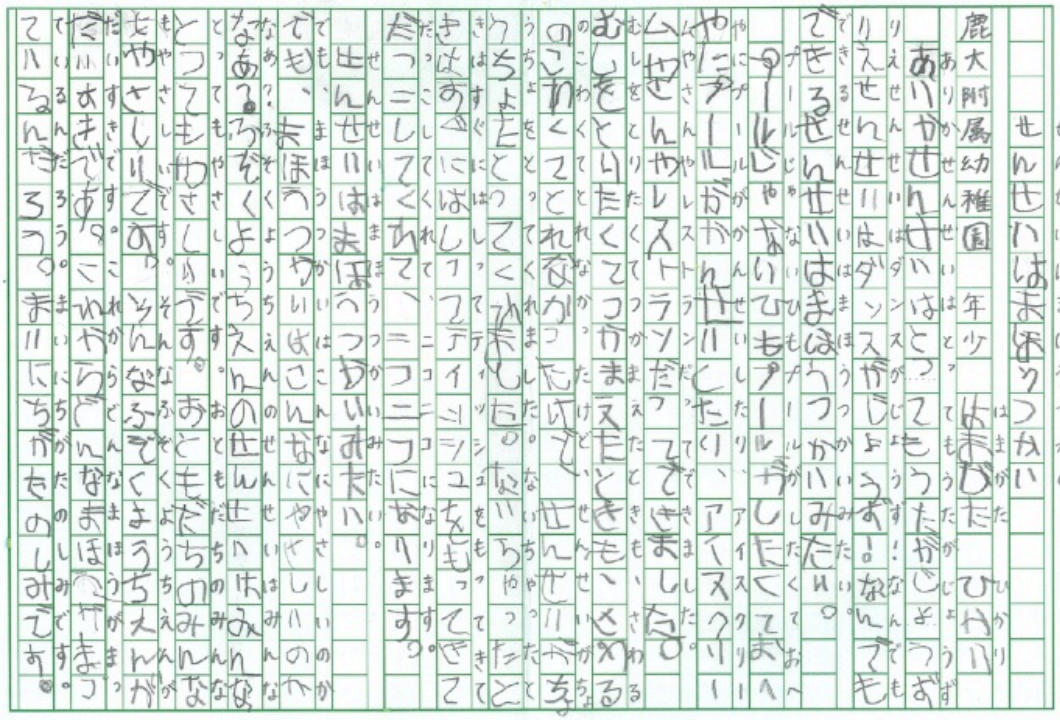
In my class, Ms.Shindo calls out to me and everyone in the class every day.

She asks us if we are going to and from school in a safe manner, if we are getting along with our friends, etc. This is something that Ms.Shindo does instinctively. Even if this a normal thing for Ms.Shindo to do, her kindness is what helps us. And everyone in the class who receives her kindness spreads kindness, growing seeds of kindness.

My class is filled with the kindness of Ms. Shindo and everyone.
I love the class of 2B.

優秀賞　絵作文

鹿児島大学教育学部附属幼稚園　年少　濵潟 ひかり



～くすのき先生からのひと言～

歌がじょうずな先生。ダンスがじょうずな先生。
毎日の活動のなかで、みんなを笑顔にしてくれる魔法使いのような先生方や友だちとの楽しいようすが描かれています。

優秀賞　絵作文

鹿児島大学教育学部附属幼稚園　年中　川畑 蒼矢

おうだんほどう

かぶしまだいがくまょういくがくぶぞく
ようちえト　ちんちゅう　がちばたそラア
ぼくのようちえんのちかくにはおうだんほ
どうがあります。ぼくは、ようちえんにいく
ときとかえるときにおうだんほどうをとおり
ます。おうだんほどうにはようちえんのせん
せいがたってくれます。
どうろには、まいろいじどうしゃがおおき
いぱす、てらっくがはしっています。しんご
うがあおになったらまいろいはたをもったせ
んせいがどうろにでてきてぼくたちをみまも
ってくれます。せんせいがいるとぼくはあんし
んしてどうろをわたれます。
せんせいがぼくにおいしっしてくれると
ぼくさいなります。せんせいが手をつなぎてくれ
るとぼくもえがおになります。
せんせい、いつもみまもってくれて
ありがとうございます。せんせいたちのこと
だいすきです。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

幼稚園に行くときも帰る時も、園の近くの横断歩道には、先生が立って安全に渡れるようにしてくれています。自動車がいても安心して渡る様子が力いっぱい描かれています。

優秀賞　絵作文

鹿児島大学教育学部附属幼稚園　年長　石井 心海

あさこせんせい

いしい ここみ

わたしのせんせいは、あさこせんせいです。いつもやさしくて、たくさんいっしょにあそんでくれます。

あさこせんせいはおいもほりのしかたをおしえてくれたり、ピーマンのそだてかたをおしえてくれます。わたしはピーマンをいっぱいそだてました。たくさんおみずをあげたいけどっぱんぱんくらいがいいよ。と、あさこせんせいがおしえてくれました。そだてたピーマンはみんなでたべました。あさこせんせいがさいごをかってきてくれて、ピーマンといっしょにたべました。いちばんおいしいピーマンでした。

ふぞくようちえんはたのしいです。あさこせんせいがいるとっとたのしいです。いつもありがとう。ピカピカのランドセルはたのしみだけど、あさこせんせいがいないとさみしいです。でもがんばります。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

いつも優しくて、いっしょにたくさん遊んでくれる先生。ピーマンの育て方を教えてもらってみんなで育てたのですね。先生のことが大好きだという気持ちがあふれています。

優秀賞　絵作文

静岡大学教育学部附属浜松小学校　２年　内藤 太智

ツマグロヒョウモンから学んだこと

静岡大学教育学部附属浜松小学校

二年　内とう　太智

ぼくたちの教室では、いろいろな生きものを育てています。谷つ先生は、ぼくたちが自由に考えてお世話をすることをいつも見守ってくれています。

谷つ先生は、虫は少し苦手です。でも、花だんのパンジーにいたツマグロヒョウモンをつかまえてきてくれました。ぼくたちでえさをしらべてあげたり、学校が休みの日には交代でもち帰ってお世話をしたりやせきにんをもって育てることができました。

ツマグロヒョウモンは、さなぎから出てきたばかりの虫にはなれず、死んでしまいました。その時はざんねんでかなしいきもちになったけど、生きものの命は、かぎりあるからこそ、毎日のお世話が大切であることを学びました。

生きものから、大切なことを学びました。谷つ先生、いつも見守ってくれてありがとう。

20×20

～くすのき先生からのひと言～

虫が少し苦手な先生が、見つけてきてくれたツマグロヒョウモン。限りある命を大切にすることを学んだのですね。観察をしながらお世話をしている様子が伝わってきます。

優秀賞　絵作文

福岡教育大学附属福岡小学校　３年　佐藤　湊人

元気な音をありがとう

福岡教育大学ふぞく福岡小学校

三年　さとう　みなと

「ポロンッポローン」ぼくの学校のチャイムは校歌になっている。ぼくは音が大好きだ。音を聞くと、不安な気持ちやつらい気持ちが風のように消える。

ぼくは昔、ピアノを習っていたけど、そのころはただ弾いているだけで楽しくなかった。だから少したってやめてしまった。

ぼくのたんにんの坂本先生は、声が大きくて陽気な音楽の先生だ。授業の時ひいてくれたピアノの音色がとてもきれいで、ぼくはもう一度ピアノをひきたいと思った。坂本先生が何かをまねたわけではないけれど、先生の音がぼくをもう一度ピアノにさそってくれた。

いつも明るく太陽のような笑顔の坂本先生だから、元気な音をぼくにあたえてくれる。ぼくもいつか先生のように、人に元気をあたえる音を、かなでられるような人になりたい。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

声が大きくて陽気な音楽の先生が弾いてくれたピアノの音色。（もう一度ピアノを弾きたい）（もっとうまくなりたい）きっとみんなの心にあるいろいろな思いに響いたのでしょうね。

優秀賞　絵作文

福岡教育大学附属小倉小学校　５年　小松 理一郎

発表は、意思表示！

福岡教育大学附属小倉小学校

五年　小松　理一郎

ぼくは、五年生になって変わったことがある。それは、人とのコミュニケーションをとることが少し上手くなったことだ。でも、何でだろう。ぼくがだした答えは、五年で担任になった本田先生の発言があったからだ。

「発表は、意思表示だ。」

という言葉だった。ぼくは、発表をする時、周りの人に、理解してほしいという気持ちをこめて発表することに努めた。すると、不思議なことに自らすすんで発表をできるようになった。友達と話すことも増えた。ここだ。そうなることで学校が好きになった。これこそがすばらしい関係だ。本田先生がいなかったら今までのぼくだったかもしれない。笑ったり怒ったりしてくれる先生。そこには先生の底知れぬ愛情があるだろう。ありがとう。本田先生。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

「発表は意思表示だ」先生のこの言葉は、文字通りコミュニケーションの基本ですね。
先生との楽しい授業の様子が描かれています。

優秀賞　絵作文

岡山大学教育学部附属特別支援学校高等部　１年　井関　仁

大好きになった陶芸

岡山大学教育学部附属特別支援学校

高等部一年　井関　仁

作業学習で初めて陶芸をする時に、「大丈夫かな、不安だな。」と心の中で思いました。そのせいで緊張しすぎて、仕上げをする時に力が強すぎて、皿を割ってしまったり、機械ろくろをする時に押しすぎてしまったり、基本の重さを比べると全く違う時がありました。その時に辻本先生が「なめす時は自分の指で確認しながらなめした方が良いよ。」と優しく笑顔で教えてくれました。そのアドバイスを受け、完成した皿を辻本先生に見せると「すごいな、井関さん。でこぼこが一つもないじゃんピとほめてくれ、すごくうれしかったです。

僕は最初、陶芸があまり上手くありませんでしたが、辻本先生が優しく笑顔で教えてくれたおかげで苦手だった陶芸がだんだん好きになりました。ありがとうございました。

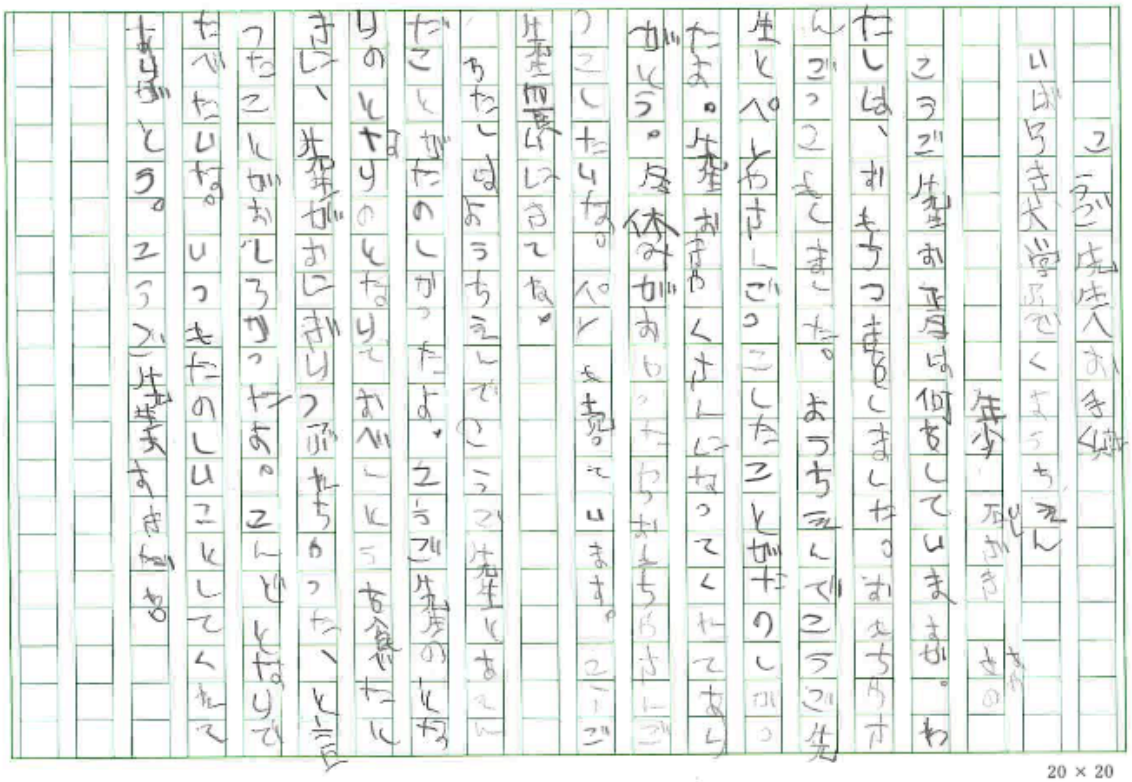
20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

はじめての陶芸にチャレンジ。失敗を重ねても、先生にアドバイスをしてもらいながら、やっと完成した喜びが明るく描かれています。

優秀賞　作文

茨城大学教育学部附属幼稚園　年少　石﨑　文乃



20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

がんばって、大好きな先生へのお手紙を書いたのですね。
パンも売っているおもち屋さんは素敵なアイデアですね。先生といると楽しいということが伝わってきます。

優秀賞　作文

福岡教育大学附属小倉小学校　１年　　林 さくら

なかよし

ふくおかきょういく大学ふぞく小くら小学校

一ねん　はやし　さくら

入学しきの日、わたしは、ともだちできるかな？せんせいこわくないかな？べんきょうちゃんとわかるかな？と、どきどきしていました。そのとき三しませんせいが、学ねんもくひょうの「なかよし」のはなしをしてくれました。せんせいは、小学校のともだちやせんせいやいきものと「なかよし」になりましょう。とはなしてくれました。それをきいてどきどきがすこしなくなりました。なぜがというとみんながよく見えるこくばんの上に「なかよし」とかいてあるので、みんなとなかよしになれそうな気がしたからです。

７月になって、お花のたねをうえました。わたしは、４しゅるいのたねのなかから、コスモスをえらんでうえました。はやくめが出てほしい、という気もちで水やりをしていたら、３日して小さくてかわいいめが出ました。それを見てわたしは、もっと大きくそだててあげたいな、とおもいました。それからわたしは、コスモスをそだてるために、まい日かんさつをして、水のりょうをちょうせつしたり、天気にあわせてうえ木のばしょをうごかしたりしました。そうしていると、きれいにお花がさきました。それを見てわたしは、コスモスにじぶんの気もちがつたわって「なかよし」になれたようでうれしかったです。

11月には、うんどうかいがありました。れんしゅうがはじまったときは、おうえんがっせんの三三もびょうしやエールがとてもむずかしくて、なかなかじょうずにできませんでした。みんなであわせてみても、リズムやうごきがそろわなくて、バラバラになってしまいました。わたしは、「あぁ、ほんばんそろうかなぁ？」しんぱいだなぁ」とふあんになりました。そのあとひる休みに、おなじしろぐみの６ねんせいが、わたしたちのまょうしつにきて、おうえんがっせんのとっくんがはじま

りました。6ねんせいは、三三てびょうしゃ
エールのうごきやかけごえのタイミングなど
をやさしく、いっしょうけんめいおしえてく
れました。わたしたちもほんばんであかぐみ
にかちたいという気もちがあったので、6ね
んせいのアドバイスをしっかりきいて、いっ
しょうけんめいれんしゅうをしました。おし
える6ねんせいとおしえてもらう1ねんせい
のいっしょうけんめいな気もちがいっしょに
なって「なかよし」になれました。うんどう
かいでは、れんしゅうのせいかをはっきしま
した。みんなのかけごえやうごきがきれいに
そろって、あかぐみにかつことができました。
入学しきのとき三しませんせいが、ともだ
ちやせんせいと「なかよし」になりましょう
といったとき、「なかよし」になるほうほう
をしりませんでした。でも、コスモスのかん
さつやおせわをしたりうんどうかいのれんし
ゅうで、6ねんせいとこころ一つにしてがん
ばっていたらいつのまにか「なかよし」にな

20 × 20

っていました。これからもちかくにあるもの
やいる人をよくかんさつして、じぶんにでき
ることをしたり、みんなで力をあわせたりし
て、もっと、ともだちや人と「なかよし」にな
ろうとおもいます。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

先生から教えてもらったたいせつな言葉「なかよし」。人だけではなくいろいろなものに、自分から心を通わせて「なかよし」になりたいと思うこと。そして「なかよし」になれたと思えることは、素晴らしいことです。

優秀賞　作文

福岡教育大学附属小倉小学校４年　村野　生芽

考える大切さ

福岡教育大学附属小倉小学校
四年　村野　生芽

春にツルレイシの種をみんなでまきました。一年生のころから、色々と植物を学校で育てていたので、種は植えれば勝手に育つと思っていました。だけど、たんにんの白はま先生から、温度計のはかり方を習って、温度を調べると、植物や動物にとって大切なのは水だけではなくて、気温や土も大切だということを発見しました。

朝、天気予ほうで暑くなると聞いたら、水とうに氷を多く入れます。そんな日は、ツルレイシにも水をたっぷりあげないと、土がかわいてしまいます。ぼくとツルレイシは全くちがう種類だけど、自然というかんきょうの中では、にている所があって、ツルレイシにきょう味がわいてきました。

芽が出るのは日が当たる方からで、ぼくのツルレイシは他のよりおそくて、心配でした。

20 × 20

ぼくも、四年生の中では身長が低くて、早く大きくなりたいなと思っているから、ツルレイシが仲間みたいに思えて、いつも大きさをみては心の中で、

「ぼくのツルレイシがんばれ！」

とおうえんしていました。

一年生の時から植物を何度も育てたけど、それまで花をおうえんしたことがなくて、ツルレイシだけがどうして気になるのか、不思議でした。

白はま先生は理科の先生だけど、一回だけ道徳の学習をしてくれたことがありました。いじりといじめのちがいをみんなで話し合いました。いつも仲良しの友達とぼくの意見はちがって、色々な意見にびっくりしました。

家に帰って、お母さんとも少し話してみました。お母さんの意見もぼくやみんなともちがっていて、こんなに近い人同士でも、大切に思っていることがちがうのは、面白いなと気づきました。

20 × 20

白はま先生はいつも答えを教えてくれません。ぼくたちにどう思う？と聞いたら、あとはぼくたちにまかせてくれます。ヒントみたいなのとか、良い意見を黒板に書いたりして、みんなの意見をまとめてくれます。

自分の力で考えると、どうでもよか。たことも、すごく気になるし、答えにたどり着いたら、大発見の気分が味わえます。

自分で考えたら、どうでもよか。た植物が、仲間みたいに大切になりました。ツルレイシがぼくよりも高くのびた時、とてもうれしくて、すごいなあと感動しました。そして、ぼくも負けないくらい、もっとがんばろうと思いました。

ぼくはみんなの前で発表が苦手で、あんまり自分の考えを持っていませんでした。でも、白はま先生の学習のおかげで、考え方はそれぞれちがっていても大丈夫だということ、自分で考えることは、大切だということを学びました。

20 × 20

友達と意見がちがっていても、お母さんと意見がちがっていても、みんなの意見と同じように、自分の意見も大切にして、これからも色々なことを自分で考えていきたいです。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

応援しながら育てたツルレイシ。友達の意見と違う自分の考え。植物も人間もどれ一つとして同じものはありませんが、しっかり成長している様子がよくわかります。

優秀賞　作文

福岡教育大学附属小倉小学校 5年　下谷　陽菜乃

嫌いが好きになったとき

福岡教育大学附属小倉小学校
五年　下谷　陽菜乃

わたしは、五年生になるときまでは、算数が苦手な科目の一つでした。なぜなら、わたしは、計算がそれほど早くなくて、積極的に手を挙げて発表する側ではなかったからです。算数の授業ではいつも、みんなが発表している姿や黒板を、ずっと見ているだけでした。それに、家では算数の教科書を開くこともしていませんでした。なので、算数の宿題、特に計算問題が出ると、わたしの友達は、裏表三十分ぐらいで終わったと言っていたのに、わたしはその何倍も時間をかけて、「算数なんて大嫌い」という一心で、宿題をしていました。

五年生になって、始業式での担任の先生の発表。大好きだった先生たちがたくさん異動してしまったので、「どの先生になるんだろう」。

20 × 20

という気持ちで待っていました。いよいよわたしのクラスの番になり、担任は算数科担当の本田先生でした。正直、算数科担当と聞いて、結構がっかりしました。わたしは、後ろから三番目にすわっていたから、顔や身長が高いかとかは見えなかったけど、とても声が大きかったのを覚えています。新しい教室に行くとき、わたしの心の中は、「算数科ってことは、授業参観や研究授業も全部算数なんだろうな。算数苦手なのに」という気持ちでいっぱいでした。

次の日、算数の授業がありました。でも、いつもの算数の授業より、少し楽しく感じました。それには自分でも少しおどろきました。それから算数の授業をしていくうちに、算数を楽しいなと思う気持ちが大きくなりました。すると、わたしは、少しずつ、算数の授業で手を挙げて、発表するようになりました。四年生までの授業では、めあてや見通しを発表するとき、全員が手を挙げるということはあ

20 × 20

りませんでした。本田先生は、見通しを発表するとき、発表した人が言ってくれた、大切なことやキーワードを、チョーワの色を変えて目立たせて文字を書いてくれるなどの工夫をしてくれています。めあてを発表するときに、手が挙がらない人がいると、

「めあての最後は『考えよう』を使えばいい。」

「見通しの、文字に色を付けている部分に『考えよう』を付ければ、めあてが立つ」。

などのことを、教えてくれました。すると、全員が手を挙げるようになりました。本田先生がたくさんの工夫をしてくれて、みんなが手を挙げるようになり、わたしはなんだか気持ち良く、うれしい気分になりました。

わたしは、最初のころ、自分の考えを説明するとき、

「ここが説明できないな、どう言えば伝わるだろう」。

となるときが、たくさんありました。そんなときでも、本田先生の授業では、次々に発表

20 × 20

がつながるので、わたしが言いたかったことをうまく言えなかったとき、みんなが言葉をつなげてくれて、説明してくれました。みんなに理解してもらい、みんなの疑問の解決案を、みんなで納得することができました。そのとき、

「発表できた。算数って楽しいな」。

という気持ちで心がいっぱいになりました。算数は、分かるととても楽しかったです。本田先生のおかげで、算数が好きな教科の一つになりました。これからも、算数の授業で、たくさん発表をして、

「算数が好き」。という気持ちを伸ばしていきたいです。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

新しい担任の先生との出会い。算数の授業での先生の工夫。みんなの協力。嫌いだった算数の授業が好きになっていく様子が、いきいきと書かれています。

優秀賞　作文

静岡大学教育学部附属静岡中学校　１年　白井　希

ずっと守られていたんだ

静岡大学教育学部附属静岡中学校
1年B組　白井　希

先生は、指示を出さない。

先生は、すぐに返事をしない。

先生は、自分の話しかしない。

生徒会長に立候補した。一年生の立候補は異例だ。右も左もわからない。挑戦だった。

立候補するかすっと悩んでいた。決断したのは締め切り前日だ。立候補には「立候補紙面」という公約を記した用紙を提出しなければならない。慌てて夜遅くに書き上げた。

後日、候補者達の立候補紙面が公開され驚いた。私のものはA4用紙一枚で、他は大長編だった。私は「作法」を知らなかったのだ。

候補者討論会はひどいものだった。一部の生徒による、私の立候補紙面への集中攻撃でほとんどの時間が潰された。終了後に友達が心配して駆け寄ってくるほどだった。

確かに調査不足だった。それは私の失敗だ。でも、「正しく」なければ何を言われても仕方ないのだろうか。悔しかった。

当然のように、選挙結果は惨敗だった。

落選後、今度は新生徒会長が選ぶ、副生徒会長に立候補した。前回の失敗を教訓に、何日も考えを練り、図や表も入れて、一生懸命数ページの立候補紙面を書き上げた。

その後、副生徒会長当選者と、その立候補紙面が発表された。私の名前はなかった。

当選者立候補紙面は、A4一枚程度だった。

私の落選を、聞こえるか聞こえないかの距離で、揶揄する者達が出はじめた。

塾の入室名簿にある私の名前に、からかうような落書きがあった。

私は、そんなに悪いことをしたのだろうか。

一年生のくせに生意気だということなのか。

すべてが悪い方向に行っているようだった。

苦しかった。

「決断したんだね。応援するよ」

生徒会長立候補紙面を提出したあの日、満面の笑みで担任の若林先生は言った。以前、立候補はやめようと思う、と言ったときには少し悲しそうな顔をしていた。それでも先生は、立候補したらいい、とは言わなかった。ただ、私が決断するのを待っていてくれた。

散々な討論会から何日か経った後、クラスだよりを配布してくれた。そこには私の写真があった。新たなことに挑戦することを、静かに、力強く讃える文が添えられていた。

副生徒会長に立候補することも喜んでくれた。副生徒会長立候補紙面を見せると、これはすごい、がんばったね、と言ってくれた。

ごく一部の、心無い人達が向ける眼差しに苦しめられていたときも、声をかけてくれた。

私は、吐き出すように苦しみを打ち明けた。先生は、静かに話を聴いてくれた。ただ、その場では特に何かを言うことはなかった。

返事をくれたのは、次の日だった。一日、家で考えてきたのだという。

「もしも自分だったらこんな風に考えるよ」と先生は話し始めた。

私の悩み一つひとつについて、この場合はこう考える、この場合はこう判断する、と細かく語ってくれた。こうしなさい、ああしなさい、とは一切言わなかった。

その話を聴きながら、私はまたそれを自分のことに当てはめて考え直し、少しずつ心が整って行くのを感じた。

先生は、指示を出さない。寄り添って、私が自分で決断するよう、見守ってくれている。先生は、すぐに返事をしない。最善の答えとなるように、しっかりと考えてくれている。先生は、自分の話しかしない。自分のこととして捉え、どう判断するかを深く突き詰めて、背中を見せてくれる。

そんな若林先生が大好きだ。

～くすのき先生からのひと言～

生徒会役員への立候補。決断すること、ベストを尽くすこと、中傷への悩み。その一つ一つを受け止め、見守り寄り添ってくれる先生のまなざしのなんと温かいことでしょう。

優秀賞　作文

福岡教育大学附属小倉中学校　２年　柏木 優里

心からのありがとう

福岡教育大学附属小倉中学校
２年Ｃ組　柏木 優里

「ありがとう」。この言葉は、誰が言っても言われても、人から聞いても嬉しく、そして心が温かくなる言葉だと私は思います。心から伝えたこの言葉ほど、心が温かくなる言葉は他にはないと私は思っています。誰かに何かをしてもらった時、自分を支えてくれた時に伝える感謝の言葉はいつも「ありがとう」です。心から「ありがとう」を伝えることはとても大事なことだと思いました。そう改めて考えるようになった出来事が２つあります。

一つ目は授業です。私が「ありがとう」の大切さについて考えさせられるきっかけとなった出会った先生です。それは、小学５年生のときに先生がいます。私はその先生に出会うまでは、感謝を伝えるときには「ありがとう」と心からではなく、言わないといけないと思い、まるで義務のように伝えていました。ある日、

20 × 20

道徳の時間に「感謝」のテーマを基に授業を受けていました。その時に先生が私たちにこの言葉を伝えました。「人は常に誰かに支えられて生きています。誰かが限りある命のゆの貴重な時間を使って、今の自分を支えてくれています。常に感謝を忘れてはいけません。だからこそ、誰かからの厚意で親切をしてもらったときは、「ありがとう」とただ言うのではなく、心からありがとうと伝えることが、しってもらった側にできる精一杯の感謝の方法です」と。私は、自分の考え方を改めるようになったこの言葉を今も忘れていません。相手が貴重な時間を使って、自分に何かをしてくれたという像しさを知れば、心からありがとうを伝えたいと思うようになりました。「ありがとう」は相手にただ言うのではなく、心から伝えることが大事だと知ることができました。２つ目は、「ありがとう」の反対の言葉を知ったときです。１つ目に書いた先生の言葉がきっかけで調べました。「

20 × 20

ありがとう」の反対の意味の言葉は、「当たり前」だそうです。それを知ったとき、なるほどなと思いました。人に何かをしてもらうのが「当たり前」ではなく、何事にも「ありがとう」という気持ちを忘れてはいけないと思いました。また、心がこもっていないっあ

りがとう」は、表向き感謝しているけど、その言葉の中身はきっと「当たり前」と伝えていることと同じことだと思いました。そのことに気づいて今度から「ありがとう」と伝えるとき、心から伝えようと思うようになりました。先生の言葉がなかったら、「ありがとう」の反対の言葉を今でも知らなかったと思います。本当の「ありがとう」とは何かを考えるきっかけを作ってくれた、先生にとても感謝しています。私は、これまでの人生の中で何百、何千人もの人にお世話になってきたと思います。そしてこれからも、たくさんの方々に支えられて生きていきます。自分が周りの人にっありがとう」と言われるより、自

20 × 20

分が周りにっありがとう」という回数の方が多いかもしれません。でも、自分に何かをしてくれたり、支えてくれたりして、誰かの優しさで親切をしてもらった時は、心の底から感謝しながら「ありがとう」を伝えたいです。その気持ちを常に忘れず、これからも大切にしていきたいです。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

ふだんからよく使う「ありがとう」。先生の言葉から、あらためてその大切さについて考えた時「有難い」という思いに込める「心からの感謝」 に気づくことができましたね。

特別賞

最優秀学校賞

福岡教育大学附属小倉小学校

優秀学校賞

福岡教育大学附属福岡小学校

千葉大学教育学部附属小学校

静岡大学教育学部附属浜松小学校

審査委員長　講評

この「作文・絵作文コンクール」のテーマは、「先生へのメッセージ」や「先生との思い出」です。第５回目を迎えた今年も全国の国立大学の各附属学校から、たくさんの素晴らしい作品の応募がありました。

全国どの学校においても、新型コロナの影響で変わらざるを得なかった子どもたちの学校生活について、現在はアフターコロナに向けての再度の見直しをすすめ、安心安全な学校生活のために、そして確かな学びのためにご苦労をされています。ただでさえ、社会環境の変化に伴い、教育現場に求められるものは増える一方です。にもかかわらず、働き改革がいわれる中で、様々な業務をこなさなければならない先生方は、その働く時間の確保にまで頭を悩ませていることとおもいます。

私が大学の授業で、学生にむけて話す「教師に求められる資質」というものがあります。たとえば、厳しいけれども親しみやすい、まじめだけれどもユーモアがある、几帳面だけれどもおおらかである、積極的であるけれども慎重である、計画的であるけれども柔軟性がある、わかりやすく教えることができるけれども子どものこだわりにはじっくりと付き合うことができる、社会人としての常識や理性があるけれどもみずみずしい子どもの感性を失っていない。といったものです。こうした一見矛盾するようなことが一人の先生に求められるのです。応募作品には、日々の様々な業務をこなしながら、子どもたちの前では、まさしくこうしたことを体現した、魅力あふれる先生がたくさんいらっしゃいました。そうした先生に対する信頼や尊敬や感謝の気持ちを読み取ることができ、審査をしながら心動かされる作品がたくさんありました。

子どもたちとの毎日に、そして先生方の人生にたくさんの笑顔があることを心より祈っています。

審査委員長　　児童文学作家　くすのき しげのり

審査委員長　略歴

　1961年生まれ、徳島県鳴門市在住。鳴門教育大学大学院修了。小学校教諭、鳴門市立図書館副館長を経てオフィスＫＵＳＵＮＯＫＩを設立。現在は作家として児童文学を中心とする創作活動と講演活動を続けている。

　絵本『おこだでませんように』（小学館）が2009年度全国青少年読書感想文コンクール課題図書に、2011年には、IBBY（国際児童図書評議会）障害児図書資料センターが発行する推薦本リスト「世界のバリアフリー絵本」に選出される。同作品で第２回ＪＢＢＹ賞バリアフリー部門受賞。2013年には『メガネをかけたら』（小学館）が全国青少年読書感想文コンクール課題図書に選定される。『ええところ』(Gakken)、『ともだちやもんな、ぼくら』『ええことするのは、ええもんや』(共にえほんの杜)『ダメ！』(佼成出版)『しょうじき５０円ぶん』(廣済堂あかつき)等、教科書掲載作品をはじめ、『Life(ライフ)』(瑞雲舎)、『あなたの一日が世界を変える』(ＰＨＰ研究所)『海の見える丘』(星の環会)、「いちねんせいの一年間」シリーズ(講談社)、「すこやかな心を育む絵本」シリーズ(廣済堂あかつき）など、２００タイトルを超える作品は、日本および海外で広く読まれている。

・日本児童文芸家協会評議員
・絵本応援プロジェクト代表
・徳島児童文学会会長
・四国大学文学部非常勤講師
（絵本・児童文学創作）

オフィシャルホームページ
http://www.kusunokishigenori.com/

・主　催　　一般社団法人　全国国立大学附属学校PTA連合会

・担　当　　広報委員会

・発行日　　令和５年